

# 大学博物館設立についてのビジョン

## *Vision for the foundation of a university museum*

高槻 成紀

麻布大学野生動物学研究室

Seiki Takatsuki

Laboratory of Wildlife Ecology and Conservation, School of Veterinary Medicine, Azabu University

**Abstract:** What the Japanese society expects for universities is changing according to the significant changes of the society. The universities exist no longer for only limited “elite” but should be open widely to ordinary people. In terms of this context, besides research and education, dispatch of the contents of activities to the society will be needed. A university museum will be an important equipment for this. Azabu University has a great potential to establish a university museum because it possess a lot of animal specimens as well as related academic materials. It is urgent to ask donation from graduated veterans because since Azabu University has a long history over 120 years, the former college was lost by damage of the World War II and the time is limited to expect donation from the old generation. It is often misunderstood that a museum is represented by exhibitions. In order to show good exhibitions, however, high quality curatorial work and a huge back yard are necessary. Curatorial work includes collection of materials, listing, maintenance, and arrangement. The museum will function for archive activities of the university. A project for foundation of such a museum should be started based on such a concept and strategy.

**Key words:** archive activity, Azabu University, curatorial work, social presence, university museum

**要旨:** 日本社会の変容にともない社会が大学に求めるものも大きく変化しつつある。大学は一部エリートのものでなくなり、広く社会に受け入れられるものになる必要がある。その意味では研究、教育の重要性は不変であるが、その内容を積極的に社会に発信する必要がある、そのひとつの装置として大学博物館は重要な位置を占める。そのために麻布大学は動物に関する標本類を十分に所有しており、十分な潜在力をもつ。120年以上の歴史がある本学では卒業生に物故者も多く、前進の学舎が戦災に遭ったことを考えあわせると、高齢な卒業生の学生時代のゆかりの品を寄贈していただくことが急務である。博物館は展示の印象が強いが、実際はバックヤードが不可欠であり、標本、資料の収集、整理、保管が重要な機能をもつ。また大学活動のアーカイブも必要である。こうしたことを踏まえて大学博物館構想を前進させたい。

### 大学の変容

私は麻布大学に大学博物館を作りたいという夢を持つようになった。そのことについてのビジョンを書いてみたい。

明治時代以降、大学がごく限られたエリートが行く

ところで、その選ばれた人たちが国を動かす高い志を持ち、実際にそうしていた時代があった。その時代は長く続き、太平洋戦争後もしばらくは、大学生は限られた人であったから、社会にもそのような見方があった。よい大学を卒業することは大きな会社に就職できることに直結し、社会的ステータスでもあったから、

入学試験は熾烈になり、高校は受験装置のようになった。1970年前後に世界的な動きと連動して学生運動が活発化し、その頃すでに大学生は少数派ではなくなっていたこともあって、社会は大学生を冷眼視するようになってきた。少なくとも自分たちのリーダーになるべき人材とは見なくなっていた。それからでもすでに半世紀近くが経ち、少子化が進み、大学は「全入」に近い状況になり、小さな大学は学生を確保するために推薦など、違う入学制度を採用するようにもなった。かくして大学生の質の低下は必然となった（例えば山下 2011）。日本の社会における大学の存在にはそのような客観的状況がある。

そのような状況において社会的存在である大学は社会から何を求められているのだろうか。大学の研究者がすぐれた研究をすることは大学の持つ変わらない機能であり、これは今後も続くに違いない。研究成果はふつう学会での発表や論文の公表という形で発信される。また大学は学生を育てて社会に送り出すという使命を持っている。高校までの一般的知識に専門的な知識や技術を教え、育てることも大学に求められる大きな機能であろう。このほかに麻布大学では動物病院が臨床的な機能によって社会に貢献している。これは医学系の大学に大学病院があることと対比される。さらに社会との接点ということを見ると、研究者個人が個別に講演をするとか、実際の調査を社会に出たおこなうという形の活動もあるであろう。また大学祭や公開講座などは大学がおこなう社会とのひとつの具体的な接点である。

このような大学のもつ社会とのつながりを、少子化による大学の「非エリート化」の流れの中で考えると、従来の活動ではそのつながりが弱いように思われる。研究者が学会発表したり、論文執筆するだけでは社会には伝わらない。卒業生が社会に出て、自分がこの大学を出たから今があるという感覚をどれだけ持てるだろうか。全入時代となればそれは期待できることではあるまい。その点、動物病院の存在はこれからさらに大きくなることが期待できると思う。研究者が調査や講演などで活躍するには、さらに積極的に広報活動などを推進する必要がある。大学祭は今や模擬店とお笑いの場と化しており、なんら大学でおこなうべき内容を持っていない。そこにも全入時代の反映がある。学生は大学に必ずしも学問を求めているのではないので

ある。それでも学生サークルが展示をしており、もう少し指導すれば参加した市民にも評価されるものになると思われる。私は研究室の学生を指導して動物の交通事故をテーマにした展示などをおこなったが、十分に手応えを感じた（高槻, 2010a, 高槻・南, 2010）。市民は模擬店も楽しみにしているが、やはり大学には大学らしさを求めているのであると感じた。また大学祭で麻布大学らしさが感じられるのは標本室の開放であろう。家畜の特殊な標本があるので、来学者からは珍しいものを見たという反応があるようだ。

## 大学と社会

こうしたことを考えると、現状では大学と社会とのつながり、あるいは社会における大学の存在という意味で、現状の麻布大学がその期待に十分応えているとは言いがたいように思われる。それに応えるためにはすべきことは、一言でいえば「大学でしている内容を積極的に発信する」ということであろう。そのためには大学でおこなわれている研究内容をわかりやすく紹介する必要がある。研究は専門的だから市民にはわかりにくくてもよいというのはまちがっている。すぐれた研究ほど誰にでも意味はわかるものであり、仮にわかりにくいとしてもわかってもらう工夫は可能なはずである。重量の意義や起源とか、分子レベルの生命現象などきわめて難解であるが、テレビ番組でわかりやすく紹介されている。また、学生が在学中にどう生長し、社会にでて活躍しているかも、社会に発信することを前提として取材し、発信すべきである。大学祭も食べて笑うことだけでなく、学ぶ喜びを感じてもらうものにすべきである。

## 大学博物館としての潜在性

そうしたことを具体的におこなうための装置のひとつが大学博物館である。その最大の機能は大学での研究内容を社会に発信することである。ただし、それは学会発表のようなパネルによる紹介ではなく、標本を主体とする展示物が主体となる。それが麻布大学で可能であるかを考えてみたい。

最も肝心な標本であるが、麻布大学は獣医学系の大学としての伝統があるため、動物標本、病理学的標本

などが充実している。またそれに関連した器官のプラスチック標本（プラスティネーション）などもあるし、教材としての家畜の人形などもある。また最近、江戸時代を中心とした馬具の折坂コレクション（高槻，2010b），増井光子先生関連の増井コレクションの寄贈があった。潜在力といえば，本学の卒業生は獣医学，畜産学，動物病院関係，動物園など，多様な動物関係の組織などで活躍しており，そうした卒業生からの広義の標本，資料を確保できる大きな潜在力もある。また越知勇一元学長関連の資料などもあるし，図書館系の資料もある。大学に博物館を作ろうとすると，こうした蓄積と潜在力があることは最大の強みとなる。

では訪問する側の潜在力はどうだろうか。私は大学博物館で奉職していた経験があるので，学術展示を行うことを提案し，実施してきた（高槻，2010b，c，d，高槻・鶴坂，2010，高槻・立脇，2010）。一連の展示は幸い高い評価を得て来た。この展示ではアンケートをとっているが，そのほとんどは「おもしろかった」，「このような展示をもっとしてほしい」と答えている。このことは学内外の人が麻布大学の研究内容を展示することを支持し，期待していることを示しており，その意味での潜在力も十分あると考えられる。

### 古い資料収集の必要性

標本あるいはもう少し広い意味での展示物という意味では麻布大学には大きな弱点があることも認識しておかなければならない。それは東京の麻布にあった本学の前進である麻布獣医畜産専門学校が1945年5月25日に太平洋戦争で空爆を受け，灰燼に帰したことである。このことはいかにも残念なことであるが，ないものはないので，悔やんでもしかたがない。しかしそれだけに重要であり，かつ急ぐべき作業がある。それは卒業生のもつ資料類を集めることである。戦災に遭ってからでも60年以上が経過しているから，当時の在学生でも80歳を超えている。すでに泉下にある先輩も多いが，あと10年もすればそのほとんどが天寿を全うされるであろう。戦中戦後の大学資料はきわめて乏しく，それだけに，あれば貴重である。物資がなかった時代であるから，たいしたものはないという考えもあるが，むしろそういう時代にこそ大学人や学生がいかに研究教育をしたかを知るよすがになるはず

である。また数は多くないであろうが，麻布大学に二代，三代と入学した家庭もあり，そういう家庭には戦前の資料がないとも限らない。とくに写真資料などは貴重である。その意味で同窓会なども一体となってこの作業を緊急に進める必要がある。

そのほかにも動物研究の裾野と，本学の卒業生の活躍した分野を考えれば，獣医学関連はいうまでもなく，畜産学，食肉関連業，動物園など多様な分野があり，そこで用いられた道具類や機器類に歴史的価値があるものも多い。獣医学だけに限定しても，解剖道具や研究機器は，戦後だけを考えても革命的な進歩をし，顧みられなくなったものも多い。そのような分野は，新しいものを取り入れることに熱心であっても，古くなったものを捨て去る傾向がある。しかし，その変化の過程を知ること，当時の研究者や担当者が何を工夫し，苦勞していたかを想像することなしに，新しい発展もないはずである。そのような意味で，獣医学関連の道具，機器を揃えるだけでも，我が国で一級のコレクションが可能なのはである。

### 資料の保管・整理

資料の収集と並行して重要なのはその整理作業である。一般にはあまり知られていないことだが，博物館の展示を表の顔とすれば，その裏には十倍も百倍もの潜在的標本類がある。それらは登録され，必要に応じて取り出せる状態にしておかなければならないし，よい状態で保管しておかなければならない。

植物標本は世界共通の大きさの台紙に貼った押し葉標本が基本であり，昆虫標本は標本箱に収めるのが基本である。これらは比較的スペースをとらず，同じ大きさなので整理がしやすい。ところが哺乳類標本は立体的であり，大型のものもあるためにスペースをとる。また液浸標本もあり，スペースをとるだけでなく，液のとり替えなどの作業も必要となる。そういう意味で動物標本が主体となる博物館は広い収蔵空間が必要となる。なお麻布大学は解剖場があるため標本作製にはよい条件を備えている。

博物館には「信頼」が重要である。自分のもつ資料や標本類がよい保管をしてもらえという信頼感がなければ寄贈をする気にはなれない。そういう博物館では標本収集がむずかしくなる。逆に保管がよく，展示

もよければ、「自分の標本もこういう展示をしてもらえるのか」と寄贈も増え、そうなる则ち展示も充実するからそれが呼び水になってさらに標本が充実することになる。上述の卒業生からの資料提供も、これまでは保管の心配があったために寄贈しなかったという事情もあったと推察される。

### 卒業生との協働

麻布大学は伝統的に大学と卒業生との連帯感が強く、同窓会の存在感も大きい。このことを博物館運営との関連で考えた場合、卒業生の存在は非常に大きいと考えられる。標本・資料の提供は既述したが、獣医師をはじめとするさまざまな動物関連の職業経験を積んだ人材は、後述する博物館公開講座の講師としても活躍してもらえ、標本・資料整理などにも協力してもらえ大きな可能性を秘めている。卒業生が博物館活動を通じて旧交を温めたり、新たな交友関係を構築することも期待される。このことは世代の違いにより、ややもすると卒業生との関係が稀薄になりがちな現代、その絆を強めるためにも重要なことであろう。

### 展 示

展示についていえば、これまでは大学祭で標本ケースに収めた標本をそのまま開示するだけで、展示そのものには十分な工夫がなされて来なかった。

これを改善すべく、すでに触れたように、獣医学部棟の展示空間で学術展示をおこなってきたが、ここはそのような目的で作られたものではないために、多くの制約がある。なんといっても一律のショーウィンドー型であるために、内容を工夫しても限界があった(例えば高槻, 2010b, c)。同じ展示物でも配置のしかた、室内の色、壁面の使いかた、ライティングなどによってまったく違うものになりうる。そうした展示空間が必要である。

こうした本格的な展示空間とは別にはるかに小さい「展示部屋」のようなものも提案したい。あまり広くない部屋程度の広さの空間に本展示の導入や麻布大学の紹介など1つか2つの展示品があり、来賓を迎えたときなどの談話室を兼ねたような空間があるのは大学にとってよいことだと思う。

### 公開講座など

展示と同時に重要なのは社会への発信機能としての公開講座などである。最も重要なのは研究者が動物学や環境学の成果を発表することであるが、ここには高度な内容をやさしく説明する工夫が求められる。これまでのオープンキャンパスや公開講座をみると、学会のシンポジウムなどとあまり違わない、専門用語を多用した難解なものが散見されるようだ。これらは聞く側への配慮が足りないと言わざるをえない。また一方的な発信ではなく、質問を受け付け、それを話題にして議論を深めるといった機会を設ける必要がある。こうしたアドリブ性を求められる発表では発表者の真の力量が問われる。

こうした講座には参加者の年齢などによってさまざまなものが想定される。数学や物理学あるいは歴史学などと違い、動植物は子供でも老人でもそれなりに理解できるという利点がある。例えばイヌとウシの頭骨が置いてあれば、それを見て子供は子供なりに、大人は大人なりに見るものが違い、それぞれに吸収するものがある。そうした利点を活かすための工夫をする余地が大きい。

こうした講座では展示物とともに、解説用のパンフレットや、ビデオ、DVDなどを用いた、わかりやすく魅力的なプレゼンテーションが必要である。そのためには、単に標本を収集、展示するだけでなく、それをいかに伝えるかの教材ソフトの開発が必要であり、またそれが可能な人材が必要である。

同時に、中高年齢者を対象とした場合、訪問者を受講者とみなすのではなく、体験を紹介してもらおうとか、中核的な人材によって講座を運営してもらおうことも可能であろう。こうした参加型の協力をしてもらうことにより、博物館と参加者との連帯感を強めることができ、後述の「地域との連携」にもつながるものと期待される。

こうした、いわば「大学外教育」は社会が必要としている生涯教育の機会としても大きな可能性を秘めているといえるだろう。

狭義の展示や講座とは別に麻布大学の大学外教育には大きな可能性がある。それは飼育動物や解剖場、実験の現場などを紹介できるということである。もちろんこれらには十分な準備と注意が不可欠であり、内容

についても慎重に検討する必要があるが、海外の博物館では標本の展示だけでなく、「標本を作る過程」の展示がおこなわれ、好評を得ている。これは料理や工芸の実演を見学することのおもしろさなどと通じるものである。

### 地域との連携

麻布大学のある相模原市は2010年に政令指定都市となり、市街地から農山村までの多様な地理的広がりをもつ。人口は72万人と、首都圏としても大きな人口を擁する。しかも東京都町田市（人口43万人）、八王子市（人口58万人）などの比較的大きな都市とも近い。したがって生涯教育のニーズは大きい潜在性を持ち、このことは高齢化が進む中で、今後さらに必要性を増すことが予測される。一方、児童・生徒の学外教育のニーズも大きく、こうしたことに応えるべく、相模原市内には相模原市立博物館をはじめとする博物館、あるいは相当施設や図書館などの社会教育施設も多い。こうした生涯教育の施設は地域性に根ざした活動をしており、その所蔵物も多いが、本学のような専門性という点では十分でない。他方、専門性という意味では宇宙航空研究開発機構（JAXA）のような国際レベルの高度な専門施設もあるが、これまで地域との連携という意味では課題も残されている。こうした状況を踏まえたとき、本学が大学博物館をもち、これら地域博物館・相当施設などと密接な連携をもつことで、地域連携型の生涯教育のニーズに応えることはきわめて重要であり、期待も大きいと思われる。

### 記録性と学問の普遍性

ここまで、社会の変容と大学のありかたという流れで大学博物館の意義などを考えてきた。そのことは十分に説得力のあることだと思うし、それによって博物館構想が実現することを期待しもあるが、大学博物館の存在理由の本質はそれがすべてではない。標本類の収集、整理、展示は博物館機能の中核をなすべきものだが、もうひとつの重要な機能は大学の記録すなわちアーカイブということである。本学の前進である東京獣医講習所の出自は明治政府の富国強兵の具現であったといえる。したがって研究対象動物はウマであっ

た。戦後は畜産学の必要から牛馬の研究が盛んになり、最近では犬猫に力点が置かれているし、野生動物の研究室もできた。このように動物学の大学ではあるが、時代とともに対象動物にも変遷があった。さらに1980年に麻布大学になってからは環境に関する研究にも力を入れて来た。こうした大学の変遷は研究だけでなく、教育や事務機構にも反映されている。そうしたことは克明に記録されるべきであり、博物館にはそのような機能もある。その意味では博物館と図書館の有機的なつながりと機能分担の整理が必要であろう。

2011年3月11日の東日本大震災は東北沿岸部の都市を襲い、多くの人命を奪い、構造物を破壊したが、その中に博物館もあった。標本類は被害にあったが、その中で一部残った標本は日本各地の博物館の協力によって修復作業が行われた（学術の動向, 2011, Asahi.com）。このことは、太平洋戦争が終盤を迎え、東京への空襲がなされるようになったとき東京大学の研究者や学生が学術標本を抱えるようにして東北地方や中部地方などに「疎開」させたことを想起させる。こうした行動の根本にある精神は先人の学問に対する敬意、研究資財を残した伝統に対する敬虔さといったものである。それは社会や政治の違いを超えた学問の普遍性の尊重であり、博物館の精神の核心にあるものである。

大学が社会的存在である以上、社会の要請に対して対応し変化してゆかなければならないが、それと同時に大学に求められるのは、そうした変化を超えて普遍性をもつ学問への憧れである。昨今、狭義の「役に立つ研究」が求められ、博物館のような伝統的な学問への風向きは厳しくなっている。しかし、数百年を乗り越えてきた学問は数十年の価値観の変化に翻弄されるようなものではない。獣医学、あるいは動物学も長い伝統をもち、麻布大学だけをとりあげても百年を超える伝統を有している。その過程で残された標本や研究資料を大切に保管整理し、よい形で社会に発信することは、先人の営為と遺志を引き継ぐ我々の責任であると思う。大学博物館がそのような精神をもって機能することを期待したい。

謝辞：原稿を作成する上で本学学術情報センターの高橋徹氏には有益なコメントを頂戴しました。

## 引用文献

- Asahi com: <http://www.asahi.com/culture/update/0630/TKY201106300138.html>
- 学術の動向. 2011. 特集「東日本大震災への対応—学術フォーラムの成果の概要—」. 学術の動向, 2011.12.
- 高槻成紀. 2010a. 生きのもののつながりを伝える — 学生による大学祭展示. UP, 2001.1: 28-34.
- 高槻成紀. 2010b. 「馬を治す道具たち」展の記録. 麻布大学雑誌, 19/20: 139-147.
- 高槻成紀. 2010c. 「草原の国の動物たち：モンゴル」展の記録. 麻布大学雑誌, 21/22: 105-116.
- 高槻成紀. 2010d. 「動物の手と足：その形態と機能」展の記録. 麻布大学雑誌, 21/22: 117-122.
- 高槻成紀・南 正人. 2010. 「野生動物への2つの視点 — “虫の目”と“鳥の目”」, ちくまプリマー新書
- 高槻成紀・鶴坂智則. 2010. 「モンゴルの野生動物：日本・モンゴル共同調査の成果」の記録. 麻布大学雑誌, 19/20: 149-153.
- 高槻成紀・立脇隆文. 2010. ロードキル展の記録. 麻布大学雑誌, 21/22: 123-127.
- 山下浩二郎. 2011. 記者有論, 高等教育最低限の学びくらは. 朝日新聞, 2011.12.6